地方創生に向けた政策（芸術祭等）に関する調査業務

報　告　書

平成２８年３月

NPO 法人　あきた地域資源ネットワーク

地方創生に向けた政策（芸術祭等）に関する調査業務

目　　次

目次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第Ⅰ章　調査趣旨　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

第Ⅱ章　調査概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

第Ⅲ章　現地調査報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　1　水と土の芸術祭 2015　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　2　大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ 2015　・・・　9
　3　別府現代芸術フェスティバル　混浴温泉世 2015　・・・・・　13
　4　瀬戸内生活工芸祭 2014　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
　　資料１　他都市事例報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22

第Ⅳ章　（仮称）あきた芸術祭への提言　・・・・・・・・・・・・・・　30
　1　有識者による検討委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
　2　芸術祭開催趣旨　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　31
　3　開催目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　33
　4　プロジェクトテーマ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34
　5　開催エリア　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34
　6　開催年度（スケジュール）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　36
　　資料２　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　38
　　東北及び東北周辺で開催される主な芸術祭リスト　・・・・　40
　7　開催期間及び時期　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　41
　8　実施体制　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　41
　9　期待される効果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　43
　10　その他　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　44

第Ⅰ章　調査趣旨

秋田市の歴史の特徴として、古代、中世、近世、それぞれの時代に城が築かれていることがあげられる。

古代・奈良、平安時代には、中央集権・律令国家の北方拠点として秋田城が築かれた。

中世・戦国時代には、戦国大名安東氏（秋田氏）の居城として湊城が、近世・江戸時代には、常陸から国替えとなった佐竹氏の居城、久保田城が築かれ、その城下町が現在の県都秋田市の基盤となっている。

古代、中世、近世の各時代における城の機能や性格は異なり、城に適した場所の条件も異なってくる。３つの時代に３つの城、これは秋田市が、時代の変化の中でも変わらず重要な役割を果たし、北日本・日本海沿岸地域の中心地であり続けた歴史の重なりを物語っている。

長い時間の中で積み重ねられ、蓄積された秋田市の歴史は、豊かな文化を育んできた。

秋田市には、竿燈や土崎神明社祭の曳山行事、郷土芸能などの民俗文化財、豊富な食材と高度な伝統技術が育んだ多様な食文化など、暮らしの中に溶け込み日々の生活を彩る豊かな文化がある。

また、江戸藩邸で花開いた秋田蘭画、種蒔く人のプロレタリア文学など時代を先取りした革新的な文化を生み、石井漠、土方巽など新たな芸術を創出したパイオニアも輩出してきた。

そして、秋田市は、豊かな自然を素材とした「ものづくり」のまちであり、伝統的な美術工芸技術の継承・発展、人材育成を目的に昭和 27 年に設立された秋田市立工芸学校は、平成７年の秋田公立美術工芸短期大学を経て、25 年には４年制の秋田公立美術大学となり、新しい芸術領域の創造に挑戦し、秋田の伝統・文化をいかし発展させる大学を目指しており、秋田市が取り組む「芸術文化によるまちおこし」に大きな役割を果たしている。

近年、日本各地でアートプロジェクトと呼ばれる芸術祭が盛んに開催されている。それらは、都市の公共施設やまちなかで開催されるものから、里山、田園、海岸、島、公園、山麓、温泉地などの開催場所はもとより、規模、形態、テーマ・視点など実に多様で、開催地の個性を色濃くにじませている。

このような状況のもと、秋田市で開催する芸術祭はどのようなスタイルが考えられるのか。それは、歴史や文化、人材、大学などの地域の文化資源、目指す将来都市像など、秋田市の過去、現在、未来を見据えた調査研究により導き出されるものであると思われる。

本調査※は、秋田市に適した、そして秋田市ならではの芸術祭のあり方について、秋田市を深く掘り下げるとともに、国内他都市における芸術祭の調査を踏まえ整理し、有識者による検討会を経て（仮称）あきた芸術祭のあり方について提言としてまとめたものである。

（※平成 27 年度秋田市の「地方創生に向けた政策（芸術祭等）に関する調査業務」委託事業）

第Ⅱ章　調査概要

他都市における芸術祭、生活工芸祭の調査は、次の４地域とした。

先　進　事　例　視　察　先			
	名　　称	開　催　地	分　野
1	水と土の芸術祭 2015 （開催期間７月 18 日～10 月 12 日）	新潟県新潟市	現代アート （郊外）
2	大地の芸術祭　　越後妻有アートトリエンナーレ 2015 （開催期間７月 26 日～９月 13 日）	新潟県十日町市、津南町	現代アート （里山）
3	別府現代芸術フェスティバル 混浴温泉世界 2015 （開催期間７月 18 日～9 月 27 日）	大分県別府市	現代アート （まちなか）
4	瀬戸内生活工芸祭 2014 （開催期間９月 13 日～９月 23 日）	香川県高松市	生活工芸 （郊外）

※１～３の芸術祭はいずれも平成 27 年開催。４のみ平成 26 年開催。

各地とも開催中の視察（１回）と終了後の事務局への聞き取り調査（１回）、計２回の調査を基本とした。なお、開催規模が大きい大地の芸術祭については、開催中の視察を２回行った。(瀬戸内生活工芸祭については、聞き取り調査のみ)

調査項目は以下のとおりとした。

【(ア）～（キ）は市からの依頼項目、(ク）～（ソ）は調査時に補足した項目】

（ア）　開催の意義、目的等
　　交流人口の拡大、芸術・文化の振興、人材育成等

（イ）　出展の手法等
　　特定分野の作品の全国公募、地元作家等による作品の出展等

（ウ）　実施までのスケジュール
　　手順・準備期間・作業内容

（エ）　実施団体
　　実行委員会や自治体直営などの方式、後援などの関係者

（オ）　開催経費
　　実施団体や関係者の出資・負担・入場料等

（カ）　来場者数

（キ）　経済効果

（ク）　市民や小中高・大学などの関わり方
（ケ）　広報の仕方
（コ）　ボランティアスタッフの募集方法、参加人数等
（サ）　食の場の提供方法
（シ）　シャトル便など、交通手段の提供
（ス）　一般のホテル・民宿等以外の宿泊サービス
（セ）　今後の開催計画
（ソ）　その他

また、芸術祭、工芸祭によっては、上記のほか、必要な調査項目を随時追加し、できる限り精緻な調査となるよう心掛けた。開催中の視察に関しては、可能な限り全展示作品の視察・写真撮影を行うよう努めたほか、スタッフや参加者の様子など、秋田市が芸術祭を開催する際に参考となるような資料を収集した。（開催プログラム、パンフレット、マップ、関係書籍、掲載新聞など）

開催終了後の聞き取り調査は、各実行委員会事務局、関係団体のほか、ボランティアスタッフ、芸術祭の参加者、マスコミ、まちなかの観光や宿泊、飲食関係者等周辺からも話を聞き、参考意見とした。特に、それぞれの芸術祭では「食」提供の場づくりに力を入れており、秋田市で開催する際に外せない内容と判断し、できるだけ多くの聞き取りや撮影を行った。

開催が平成 26 年夏だった瀬戸内生活工芸祭については、前年開催した第２回実行委員会の代表から話を聞いたほか、香川県、高松市、関係スタッフなどを対象に聞き取り調査を行った。

別府混浴温泉世界インフォメーション

大地の芸術祭・越後まつだい里山食堂

第Ⅲ章　現地調査報告

水と土の芸術祭 2015　　【現地調査日：平成 27 年９月８日（火）～11 日（金）】

新潟市は平成 13 年から 17 年にかけて近隣 14 市町村と合併し、人口 80 万人を超す都市となった。信濃川、阿賀野川という、国内でもトップクラスの大河川の河口に発達した新潟市は、洪水との戦いの歴史を持つ町でもあったが、現在では河川の流路変更や河川改修などにより、水害の町、運河の町というイメージは忘れ去られた感がある。

平成 21 年（2009）に新潟市で始まったアートフェスティバル「水と土の芸術祭」は、この２大河川が運んだ膨大な量の水と土をタイトルに冠している。“新潟でしかありえない文化の掘り起こし”を目指し、第１回は合併した市町村同士の個性や地域資源発掘として新潟市の全域で展開、第２回は開港都市新潟に光を当て、信濃川河口近くの万代島周辺をエリアとするアートの祭典を行った。さらに第３回となった平成 27 年は「潟」をステージとした。鳥屋野潟、福島潟、佐潟、上堰潟という４つの潟を中心に、中心市街地から田園地帯、海岸部など、さまざまな地点でアートの展示やイベントが開催された。

開催期間は平成 27 年７月 18 日から 10 月 12 日まで、87 日間という長期にわたった。新潟市は大規模合併したため、市の面積が非常に広い。第１回の芸術祭はその市全域をエリアとして開催したため、参加者は移動に苦労した。第２回はエリアを万代島周辺に絞り、第３回となった今回は潟と市街地に絞ったため、参加者は移動しやすかったようだ。市が行ったアンケート結果を見ても、潟を会場にしたことへの反応はよかった。

また潟エリアと展示アートの関係に“水と土”のイメージが具体的に表れていた。潟エリア中最大のステージとなった鳥屋野潟は市街地に近く、展示作品の背後にビル群が見えたりするなど、独特のアート景観を醸し出していた。福島潟、佐潟、上堰潟もそれぞれ個性が出ていた。また、海・山エリアに、過去２回の芸術祭で作られた恒久作品が点在しており、中には時を経て自然と一体感が生まれ、独特の光を放っている作品も見られた。

新潟の PR ポイントの一つになった感がある市民プロジェクトは、開催期間が長いため、外からの参加者が見たり参加したりできるタイミングが難しいと感じた。また、開催会場の位置が少しわかりづらく、この点には工夫が必要と感じた。しかし、市民プロジェクトながら、大きな収穫もあった。海外からアーティストを呼んで、地域の人たちと大規模アートを展開したり、国内アーティストが魅力的な作品の制作をするなど、熟度が感じられた。採択件数も 109 件まで増えたという。今後はさらなる高まりが期待できるだろう。

また、公式ガイドブックの紙面各所に現れているが、市内で発行されている４つのタウン誌が連合体を作り、食の紹介などの面で協力していた。また地元新聞の応援的な協力も大きかったと聞いた。秋田市も新潟市と同じ県庁所在地。里山や半島、島など自然のなかで展開する芸術祭とは趣きが違い、新潟市の取り組みは参考になる点があると感じた。

新潟市はトリエンナーレ形式による開催としている。市内外の人はその中間の２年間に何に触れ、何を見ることができるのか。市民プロジェクトのありようも含めて、準備期間として費やすだけではないと思うので、この点の確認も必要だと感じた。

水と土の芸術祭 2015

ベースキャンプ入り口

＜ベースキャンプ　新潟語るカフェ購買部＞

＜ベースキャンプ　アプローチ(岡昇平＋徳本賢治)＞

＜ベースキャンプ　BOAT HOUSE DOCK YARD
[船の家　造船所]（日比野克彦）＞

＜鳥屋野潟エリア　清五郎さん（宮内由梨）＞

＜鳥屋野潟エリア　田舟で漕ぎ出す。（大矢りか）＞

＜鳥屋野潟エリア　船の家 造船所（日比野克彦）＞

＜鳥屋野潟　つぎつぎきんつぎ（岸本真之）＞

＜福島潟エリア　知識の護美箱(project GOZU-NS)＞

＜佐潟エリア　佐潟なりわい観測舎
（アトリエ・ワン）＞

＜まちなかエリア　新潟の夢
（ワン・ウェンヂー・台湾）＞

＜海エリア　Shinohara`s House(アン・グラハム)＞

＜海エリア　心園の渡り(グアン･ファイビン･中国)＞

＜海エリア　おひるねハウス（南川祐輝）＞

＜阿賀エリア　旅地蔵　－阿賀をゆく―（高橋伸行）

＜阿賀エリア　旅地蔵　阿賀を行く展示会場受付＞

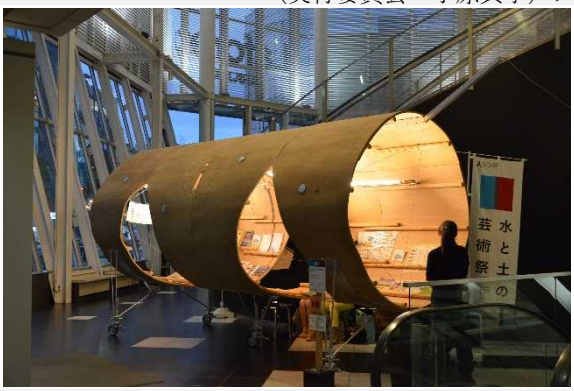
＜市民プロジェクト　「清五郎八人衆」を
未来に語り継ぐ（清五郎倶楽部）＞

＜市民プロジェクトー越後國　古町鯛車雪洞
(ぼんぼり)で、人降る町へ(柳都わいやらの会)＞

＜市民プロジェクト　矢垂川プロジェクトパート２
（福井自治会）＞

＜市民プロジェクト　味方アートプロジェクト
（実行委員会・小原典子）＞

＜こどもプロジェクト　スミ（墨･隅）におけない
お絵描き道場（山口晃）＞



＜An Object from the Mountain(シャオ・シャン・
中国)＞

大地の芸術祭　　越後妻有アートトリエンナーレ 2015

【現地調査日：平成 27 年８月９日（日）～12 日（水）、９月 12 日（土）～13 日（日）】

国内アートフェスティバルのトップランナー的な存在。今やこの芸術祭を手本にしたり刺激を受けたりして、全国各地で様々なアートの祭りが開催されている。その数は 100 カ所を優に越えたと言われている。それまで芸術祭というと、美術館やまちなかで展開するものがほとんどだったが、大地の芸術祭が里山、それも過疎でお年寄りしかいないような集落や廃校などをメイン舞台にして開催し、東京など大都会から若い人たちが見学に訪れるようになってから、日本の芸術祭に新たなメニューが加わった感がある。

越後妻有とは、市町合併して十日町市となった旧５市町村と津南町の地域を表す。平安時代のこの地域の呼び名・妻有荘（つまりのしょう）に越後国を合わせた名称だ。地理的、歴史的背景をもとにした名前だが、このように事業が行政区分を超えた場合のネーミングは重要である。

平成の大合併がこの芸術祭が生まれるきっかけだった。新潟県は大型合併を見越して、1994 年に「ニューにいがた里創プラン」を策定、県内６圏域で「ほかにはないもの」で地域づくりをスタートさせた。十日町地域もその一つで、県職員が「まちづくりにアートを」として東京から招へいしたのが、総合ディレクターとなる北川フラム氏だった。

地域に入り始めた北川氏を待っていたのは、住民や議員たちから受ける強烈なアート反対論、不要論だった。地域の既存芸術団体からも反対された。それでも集落ごとに住民説明会を繰り返すこと４年間に約 2000 回。さらにさまざまな準備プロジェクトの積み重ねで、平成 12 年（2000）に第１回開催にこぎつけた。入場者は約 16 万 2,800 人だった。

大地の芸術祭が地域に与えた成果は〔別紙資料１〕の効果に記載したが、一つの芸術祭が開催地域に与えたプラスのインパクトとしては、大いに評価できる成功例の一つといえる。アートを参加人数や経済効果だけで評価することは危険だが、大地の芸術祭はそれもほぼクリアしているようだ。

この越後妻有、とにかくエリアが広い。760 平方キロメートル、東京 23 区や琵琶湖以上の面積がある。そこに山と谷があり、川があり、集落や町がある。自動車を持たないと目当てのアートに行き付くのは困難だ。また近くまで行っても探し出す苦労が伴う。そんな中、イエローのイメージカラーで作られた看板はとても目立ち、見つけると一安心する。

地域の核になるアート会場では、地元のお年寄りと都会から来た若者たちが受付をしているが、国内外から集まるアーティストの作品づくりにこの両者の手が欠かせない。これがこの芸術祭の大きなポイントだ。「こへび隊」と名付けられたボランティアサポート隊員が、地元の人と一体になって生き生きと働いている。「こへび隊」が地域に入って、お年寄りの心をとかしたのだ。登録人数は年によって異なるが、おおよそ千人前後とのこと。この応援団システムの成功が、芸術祭のありようを変えたと言っても過言ではない。

「人間は自然に内包される」。大地の芸術祭の基本コンセプトである。この芸術祭は自然を欠いては成立しない。さらに地域の人たちを欠いても成立しない。日本で生まれたニュータイプの芸術祭モデルは、日本を超えアジアに広がり始めている。

大地の芸術祭　　越後妻有アートトリエンナーレ 2015

＜Tエリア　蓬莱山（ツァイ・グオチャン）＞

＜Tエリア　うぶすなの家ランチ＞

＜Tエリア　ヤマノウチ
（杉浦久子＋杉浦友哉＋昭和女子大学杉浦ゼミ）＞

＜Tエリア　森林梦境　森の夢　（シ・ハイ）＞

＜Tエリア　Kiss&Goodbye（ジミー・リャオ）＞

＜Tエリア　絵本と木の実の美術館(鉢＆田島征三)＞

＜Tエリア　snow country（倉谷拓朴）＞

＜Kエリア　雪のめぐみ（芝山昌也）＞

＜Kエリア　捨てられたもの(リュウ・ジァンファ)＞

＜Nエリア　未来への航海（河口龍夫）＞

＜Nエリア　ポチョムキン
（カサグランデ＆リンターラ建築事務所）＞

＜Nエリア　ここで、深呼吸
（勅使河原茜＋草月サマーセミナー）＞

＜Nエリア　カクラ・クルクル・アット・ツマリ
（ダダン・クリスタント）＞

＜Nエリア　清津倉庫美術館(戸谷成雄ほか３名)＞

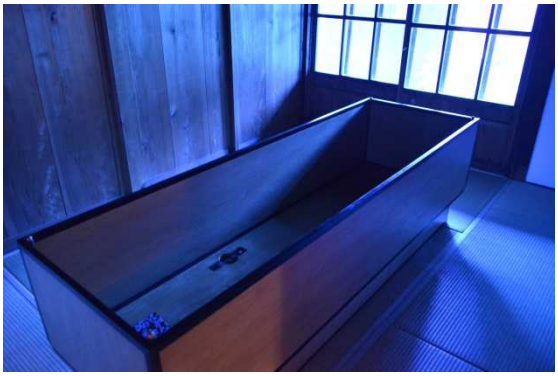
＜ Dエリア　花咲ける妻有（草間彌生）＞

＜Dエリア　棚田（イリヤ&エミリア・カバコフ＞

＜Dエリア　リバース・シティー
（パスカル・マルティン・タイユー）＞

＜Dエリア　脱皮する家
（鞍掛純一＋日大芸術学部彫刻コース有志）＞

＜Yエリア　最後の教室
(クリチャン・ボルタンスキー＋ジャン・カルマン)＞



＜Yエリア　夢の家(マリーナ・アブラモヴィッチ)＞

＜Mエリア　津南のためのインスタレーション
ーつながりー（瀧沢潔）＞

＜Mエリア Untitled project for Echigo-Tsumari
（パオラ・ピヴィ）＞

＜Mエリア　時の殻（滝沢達史）＞

＜閉会式　こへび隊＞

別府現代芸術フェスティバル　混浴温泉世界 2015（大分県別府市）

【調査日：平成 27 年８月 26 日（水）～29 日（土）】

大分県別府市で開催する同芸術祭は、第１回が平成 21 年（2009）４月 11 日から６月 14 まで、65 日間にわたって開催された。以降、平成 24 年に第２回、平成 27 年に第３回と回を重ねている。今回の参加アーティストは 100 人（団体）を大きく超えた。

日本一の湧出量を誇る大温泉地別府。その中心市街地をメイン会場に展開する「混浴温泉世界」は、その名から想像できるように、他の芸術祭とは一線を画した個性的なアートフェスティバルである。「世界は不思議に満ちている」というテーマが表すように、混とんとした別府のまちや小路で繰り広がられる「怪しげで、ちょっと危ない」アートは、参加者を魅了する。

大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭のように、50 万人、100 万人と参加者が国内外から集まる大芸術祭や、大都市で開催するアートフェスティバルとは一線を画し、温泉町の裏通り、廃ビル、空き店舗、浴場、デパートの未利用フロアが舞台となる独特のアートシーンは、主催の NPO 法人 BEPPU　PROJECT 代表理事で、同芸術祭の総合ディレクターである山出淳也氏の個性によるところが大きい。このユニークな芸術祭が、国内のアートシーンに与えたインパクトは大きく、特に若いアーティストたちは強い影響を受けているようである。廃ビルや閉鎖した映画館を舞台にする秋田県大館市のゼロダテも、少なからず影響を受けているのではないだろうか。

また、同芸術祭の特徴の一つに、アートツアー形式がある。第３回の例でいうと、「アートゲートクルーズ」「ベップ・秘密のナイトダンスツアー」だが、参加者が各回 15 名、50 名（各前売り 1,500 円）という定員制で実施するため、確実に参加人数と参加料を積み上げることができるシステムとなっている。インターネットで販売するチケットはたちまち完売し、参加できない人からの苦情のため、どんどん増便したほどである。ほかにも「永久劇場・恐怖の館」という現代風お化け屋敷は 500 円の入場料金だが、こちらも数時間の入場待ちという人気だった。スタンプラリーシステムを取る芸術祭が多い中、別府はラリーを行っていない。これも一つの特徴である。

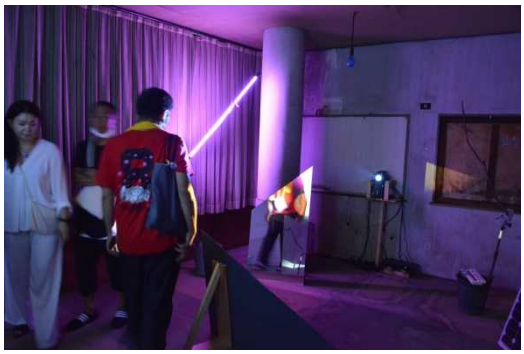
新作アート以外に、第１回からのパーマネント（恒久）作品がまちなかに点在し、BEPPU PROJECT がセレクトしたり独自に開発したりした工芸品や食品をまちなかのショップで販売。それらの中を歩き回り、温泉街の食堂で料理を食べる参加者たちは、いかにも楽しそうだった。また、ベップ・アートマンス 2015 という、「混浴温泉世界」実行委員会が主催して毎年行っている文化・芸術の祭りも同時開催。市民が主体となって進める市民文化祭として、「混浴温泉世界」とは一味違う楽しさを提供している。

「混浴温泉世界」は、全３回の開催で終了する計画で進めたそうで、公言通り今年度の第３回で終了した。今後は大分県、別府市と一体となり、これまで以上に「とんがった」アートフェスティバルを開催していく計画だという。アートと地域が組み合わさり、今後どのような新しい世界を見せてくれるのか、期待したいところだ。

別府現代芸術フェスティバル　混浴温泉世界 2015（大分県別府市）

＜ナイトゲートクルーズ・商店街＞

＜ナイトゲートクルーズ・旧映画館＞



＜ナイトゲートクルーズ・廃ビル＞

＜ナイトゲートクルーズ・バラ色の人生（大友良英）＞

＜ナイトゲートクルーズ・閉店したスナック＞

＜ベップ秘密のナイトダンスツアー＞

＜ベップ秘密のナイトダンスツアー・商店街でのダンス＞

＜ベップ秘密のナイトダンスツアー・波止場神社境内＞

＜ベップ秘密のナイトダンスツアー・廃ビル地下＞

＜末広温泉浴場壁絵（大平由香里）＞

＜永久劇場・恐怖の館＞

＜Scene（国本泰英）＞

＜Evidense Clouds　(HITOTZUKI 壁画)＞

＜Higugma［Breath. 息］（ラニ・マエストロ）＞

＜別府 04.11 - 06.14. 09（マイケル・リン）＞

＜ふすま絵（マイケル・リン）＞　　＜場所の記憶（マテー・アンドラス・ヴォグリンキク）＞

＜混浴デパート　海と山の間で生きている（浅井裕介）＞　＜トキハ天空混浴劇場（イワモトジロウ）＞

＜清島アパート＞　　＜清島アパート・小野愛＞

＜KASHIMA2015　A・チョズコ、S・ビズワズ＞　　＜まちなかに並ぶのぼり＞

瀬戸内生活工芸祭 2014　　【現地調査日：平成 27 年 7 月 13（月）～15 日（水）】

工芸祭会場の一つである女木島に渡るフェリーに乗りやすいよう、高松港に隣接したホテルを予約した。そのホテルの部屋から見た瀬戸内海のたたずまいが忘れられない。窓から右手に屋島、その先に小豆島、中央には会場となった女木島（めぎじま）と背後に男木島（おぎじま）、そのほか名前も知らない島々が、瀬戸内の海流の中に浮かんでいた。このような自然景観の中で開催された生活工芸祭は、ものを使い捨ての道具として扱わず、さりげなく生活の中に取り入れて使う人たちから、共感をもって受け入れられたのではないかと感じた。

高松は江戸時代から漆器づくりが盛んで、現在は県立高松工芸高等学校が後進育成に努めている。しかし、全国に知られた工芸の町とは言えない高松市で、なぜ生活工芸祭がスタートしたのか。第２回実行委員会代表の岡昇平さんにお話を聞いた。

高松市出身で奈良市内のカフェとクラフトの店「くるみの木」オーナーの石村由起子さんが、2010 年に高松市内にオープンしたクラフトショップ「まちのシューレ 963」をプロデュースした。そのころ、高松市で生活工芸祭を開催できないかという構想が浮かんできた。石村さんのご紹介で、松本市に住む木工作家であり、クラフトフェアまつもとのリーダーでもある三谷龍二さんに総合ディレクターをお願いし、実現に至ったという。

インターネットに掲載されていたインタビューで、三谷さんは生活工芸に関し、以下のような言葉を述べている。「それまで一部のマニアのものだった工芸や骨董を、生活者の側から捉え直し、生活の中で使えるものとして再発見しようとした」（アネモメトリ 25 号）。

第１回瀬戸内生活工芸祭は平成 24 年（2012）、実行委員会（香川県ほか）方式で全国公募によるクラフトフェアを開催した。会場は高松城址の玉藻公園と女木島。全国 429 名から応募があり、審査で 87 名の作家が展示販売を行った。入場者数は玉藻公園が約１万人、女木島が約 1,500 人という結果だった。参加者が女木島とまちへ流れ出した効果と合わせ、成功という評価を得ている。事業費は県を通して国の予算を確保した。

関係者は第２回開催を企画したが、自治体予算がつかず、手弁当で開催することを決意し、実行委員会を組織し開催にこぎつけた（事業内容は〔別紙・資料１〕を参照）。

平成 27 年は開催年ではないため、現地の様子を見ることはできなかったが、これまでの関係者に多数会うことができた。玉藻会場は、全国各地で開催されるクラフトフェアのような形態で催されたが、６人の招待作家が女木島で展開した「島の家の６つのギャラリー」は、「暮らしに『有用』なもののほか、『無用』だけれど心を解放し気持ちを楽しませてくれるもの」（リーフレットより）が展示され、訪れた人たちを和ませてくれた。２会場とも「食」の提供には心を尽くし、公募で集まったお店や個人が手間暇かけた食を提供した。

取材をしていると、２回の開催関係者からクラフトフェアに対する意見が聞こえてきた。作家がビジネス的になってきて、売れるものを作る傾向が強くなってきたし、文化的な高まりより、イベント的要素を強く感じたという。平成 28 年はその反省を込めて、クラフトフェアを開催しないで、女木島を会場にしたものづくりセミナーと、「無用」なものの展示を行う計画のようだ。工芸祭の未来に向けたメッセージの場となる予感がする。

瀬戸内生活工芸祭 2014

瀬戸内生活工芸祭 2012 ポスター

瀬戸内生活工芸祭 2014 ポスター

玉藻公園会場１

玉藻公園会場２

玉藻公園マルシェ

玉藻公園クラフト販売（2012）

女木島に渡る「めおん丸Ⅱ」

高松港から船で 20 分の女木島

海辺のいえ（ナカオタカシ）

女木島アート（ナカオタカシ）

女木島　集うものたち　テングサのうつわ(岩谷雪子)

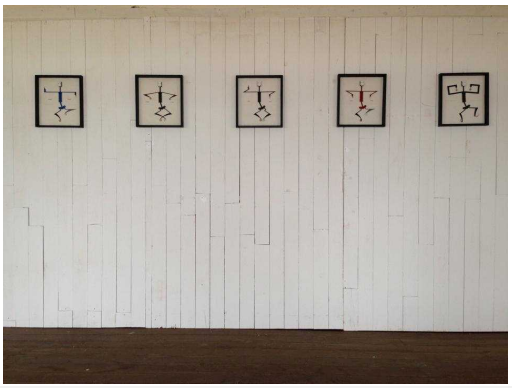
女木島　集うものたち　崩れる彫刻（岩谷雪子）

女木島　ここからはじまる（吉田次朗）

女木島　土器制作（熊谷幸治）

女木島　土器　（熊谷幸治）

女木島ミュージアムショップ



女木島　島の家の６つのギャラリー（恩塚正二）

女木島 室内展示１（2012）

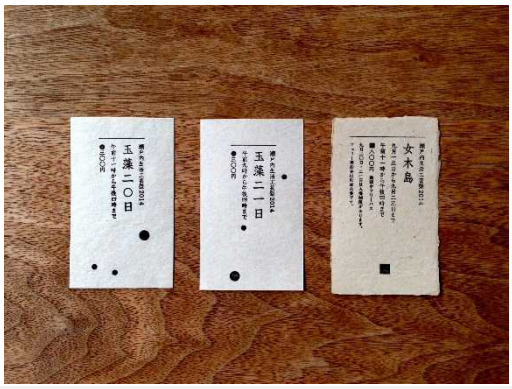
女木島 室内展示２（2012）

女木島　いりこのやまくにさん　うどん

女木島　トラネコボンボン弁当

女木島　アアルトコーヒー

女木島　貝の整理券



入場券

他都市事例報告

（資料１）

	新潟市 （水と土の芸術祭 2015）第３回	十日町市・津南町 （大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2015）第６回
基本理念	私たちはどこから来て、どこに行くのか ～新潟の水と土から、過去と現在を見つめ、未来を考える～　（テーマ「水と土」）	人間は自然に内包される （テーマ①人間が自然・文明とかかわる術こそが“美術”　②都市と地域の交換）
総括		
課題		
効果		

他都市事例報告

	別府市 （別府現代芸術フェスティバル 2015　混浴温泉世界）第３回	高松市 （瀬戸内生活工芸祭 2014）第２回
基本理念	大地から湯が湧きだし、窪みに溜まる。それは誰のものでもない。人はそれを慈しみ、自発的に守り維持する。 （テーマ　世界は不思議に満ちている）	生活工芸との出会い方を、新しい形で問い直し、今なぜ生活工芸なのかを検証する。 （サブタイトル「海と島と町を巡る」）
総括		
課題		
効果		

他都市事例報告

	新潟市 （水と土の芸術祭 2015）第３回	十日町市・津南町 （大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2015）第６回
主催	水と土の芸術祭 2015 実行委員会	大地の芸術祭実行委員会
共催	東アジア文化都市 2015 新潟市実行委員会	NPO 法人越後妻有里山協働機構
後援	総務省、経済産業省、関東地方環境事務所、駐新潟大韓民国総領事館、在新潟ロシア連邦総領事館、中華人民共和国駐新潟総領事館	特になし
助成	平成 27 年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業、一般財団法人地域創造、台湾文化部、台北駐日経済文化代表処台湾文化センター、私的録音補償金管理協会（sarah）	平成 27 年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業、公益財団法人福武財団、伍集成文化教育基金、一般財団法人地域創造、一般財団法人地域活性化センター、公益財団法人内田エネルギー科学振興財団、公益財団法人花王芸術・科学財団、公益財団法人河川財団 河川整備基金、公益財団法人新潟県文化振興財団、公益財団法人野村財団、公益財団法人三井住友海上文化財団、タイ王国大使館、ほか 14 の国外助成
協賛	新潟運輸グループ、新潟日報社、亀田郷土地改良区ほか	Benesse、JR 東日本、KEEN、BMW、ほくほく線、星と森の詩美術館、株式会社村山土建、雪国観光圏、ほか 40 以上の企業が協賛
会期	平成 27 年７月 18 日（土） ～10 月 12 日（月・祝） 87 日間	平成 27 年７月 26 日（日） ～９月 13 日（日） 50 日間
事務局体制	・新潟市職員で構成。 準備の１年目は７名くらい、２年目 10 月頃から徐々に事務局員は増え始め、開催年は 20 名ほど。市職員７名程度を中心に、任期付きの職員で構成する。 ・総合ディレクターは市の嘱託職員として事務局に常駐。	・実行委員会事務局は十日町市職員。準備年は６人、開催年は９～10 人程度市から派遣し、開催期間中は臨時職員を加え 25 人以上となる。 ・デザイン、招へいアーティスト選択、公募と審査、アーティストとのやりとり、在京マスコミ対応、海外対応などは北川氏の会社（株）アートフロント・ギャラリーに業務委託。 ・地元作業、関連施設指定管理、集落・作家・行政・こへび隊のコーディネートなどは NPO 法人越後妻有里山協働機構に業務委託。 ・観光面は十日町市観光協会に業務委託。

他都市事例報告

	別府市 （別府現代芸術フェスティバル 2015　混浴温泉世界）第３回	高松市 （瀬戸内生活工芸祭 2014）第２回
主催	別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会	瀬戸内生活工芸祭準備室
共催	独立行政法人　国際交流基金 ASIA center	高松市
後援	別府市、大分県教育委員会、別府市教育委員会、公益財団法人 ツーリズムおおいた、別府商工会議所、一般社団法人 別府市観光協会、別府市中心市街地活性化協議会、ほか 19 の企業	特になし
助成	文化庁（平成 27 年度文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業）、公益財団法人 福武財団、一般財団法人 大分放送文化振興財団	特になし
協賛	全日本空輸株式会社、アサヒビール株式会社、株式会社大分銀行、株式会社資生堂、株式会社トキハ別府店、ほか 21 の企業	特になし
会期	平成 27 年 7 月 18 日（土） ～９月 27 日（日）　72 日間	平成 26 年 9 月 13 日（土） ～９月 23 日（火・祝）　11 日間
事務局体制	・地元の NPO 法人 BEPPU PROJECT が主催・事務局運営を担っている。 ・地元の中高年者が受付の「ばんだいさん」、アートツアー補助など、各種スタッフとして支援。 ・地元大学である立命館アジア太平洋大学や別府大学からインターンで学生が参加。 ・東京の企業から社員の研修先としてスタッフ派遣もある。	・第１回は香川県が主体となった実行委員会が主催し、第２回は市民主体の実行委員会が主催した。 ・第２回は市民だけで事務局を担ったが、専用事務所は設けなかった。

他都市事例報告

	新潟市 （水と土の芸術祭 2015）第３回	十日町市・津南町 （大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2015）第６回
入場者数	市民プロジェクト（12 万 9,787 人） 子どもプロジェクト（6 万 5,621 人） アートプロジェクト（57 万 6,586 人） シンポジウム（1,235 人） 食・おもてなし（8,131 人） その他（1,897 人） 合　計 78 万 3,257 人	現代美術館［キナーレ］5万7,149人（前回9万3,174人　61.3%） 光の館2万4,244人（2万4,910人　97.3%） まつだい「農舞台」3万7,169人（4万4,764人83.0%） 森の学校キョロロ4万1,887人（5万3,178人　78.8%） 主要21作品32万3,966人（25万5,732人　126.7%） 小計…① 48万4,415人（47万1,758人　102.7%） イベント・ワークショップ…② 2万6,275人（1万7,090人153.7%） 合計（①＋②）51 万 690 人（48 万 8,848 人 104.5%）
開催年予算（決算）		

他都市事例報告

	別府市 （別府現代芸術フェスティバル 2015　混浴温泉世界）第３回	高松市 （瀬戸内生活工芸祭 2014）第２回
入場者数	混浴温泉世界　53,825 人 ベップ・アート・マンス　約　53,736 人 合　計　約 107,561 人 ・アートゲートクルーズ（85 回）　1,446 人 ・ベップ秘密のナイトダンスツアー（26 回）　1,434 人 ・永久別府劇場・恐怖の館（26 日間）　3,201 人 ・わくわく混浴デパートメント　46,362 人 ・記念シンポジウム　180 人 ・ベップ・アジアンダンスナイト！　270 人 ・わくわくどりのカーニバル、他　932 人	・玉藻会場　約 10,000 人 女木島　約　1,000 人
開催年予算（決算）		

他都市事例報告

	新潟市 （水と土の芸術祭 2015）第３回	十日町市・津南町 （大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2015）第６回
事業規模	7 月 18 日～10 月 12 日まで 87 日間 ・実施事業 109 プロジェクト ・子どもプロジェクト、ワークショップ全 36 回　参加者延べ 1,811 人 ・パフォーマンス７企画・12 公演・参加者延べ 1,958 人 ・シンポジウム４回・参加者延べ 966 人 ・座談会　５回・参加者延べ 269 人 ・食・おもてなし４会場での期間中通常営業のほか、食の交流会・５回・参加者延べ 142 人、地域のおもてなし参加者延べ 3423 人、その他事業参加者延べ 1,223 人	7 月 26 日～９月 13 日まで 50 日間。 ・10 のエリア、参加集落 110 か所。展示作品 380 点（うち恒久作品 200 点）。 ・参加アーティスト約 400 人・団体、35 か国。 ・参加大学・研究室 13 校。 ・14 の廃校をアートや食、宿泊施設に再利用。 ・廃屋利用のプロジェクト多数あり。
市民プロジェクトの規模・予算		

他都市事例報告

	別府市 （別府現代芸術フェスティバル 2015　混浴温泉世界）第３回	高松市 （瀬戸内生活工芸祭 2014）第２回
事業規模	7 月 18 日～９月 27 日まで 72 日間。 ・展示作品数 30 点以上。 ・参加アーティスト　100 人（団体）以上。 ・ベップ秘密のナイトダンスツアー、アートゲートクルーズ、永久別府劇場・恐怖の館など参加型アートが中心。 ・市民プロジェクトであるアートマンス参加 88 プログラム。	平成 26 年９月 13 日～９月 23 日まで 11 日間 ・会場２か所（玉藻公園、女木島）。 ・参加作家 61 人（木工・漆９、石２、紙、竹３、陶磁器 15、ガラス９、金属４、織り・染色８、皮革３、アクセサリー４、その他４）。 ・女木島「島の家の６つのギャラリー」として６名のクラフト作家参加。 ・せとうちマルシェ（飲食）13 店。
市民プロジェクトの規模・予算		

第Ⅳ章　（仮称）あきた芸術祭への提言

１．有識者による検討委員会

有識者による検討委員会（以下「検討委員会」という。）を３回開催し、提言内容をまとめた。

検　討　委　員　会　委　員	
秋元　雄史　氏	金沢 21 世紀美術館館長 秋田公立美術大学客員教授
藤　浩志　氏	十和田市現代美術館館長 秋田公立美術大学教授
加藤　淳　氏	株式会社アート・コンサルティング・ファーム代表取締役

現地調査による調査資料と、その後の各芸術祭事務局等を対象とした、聞き取り調査による資料をもとに、検討委員会を開催した。委員会の開催・進行は、調査受託者である NPO 法人あきた地域資源ネットワークが担い、進行は同法人の鐙啓記が務めた。

検討委員会開催状況		
開催日	検　討　概　要	会場
平成 27 年 ９月 30 日	①経緯説明（秋田市） ②別府、新潟、越後妻有の現地調査報告（地域資源 NW） ③意見交換 ④その他	秋田市拠点センターアルヴェ４F 洋室 C
平成 28 年 １月 12 日	①聞き取り調査後の他都市事例報告（地域資源 NW） ②（仮称）あきた芸術祭の提案（素案）をもとに意見交換 ③その他	秋田市拠点センターアルヴェ４F 洋室 A
平成 28 年 ２月 18 日	①地方創生に向けた政策(芸術祭等)に関する調査業務報告書(案)をもとに意見交換 ②その他	秋田市役所 会議兼応接室

なお、第２回、第３回の検討委員会は、秋元委員のスケジュールが合わず、後日、調査受託者が聞き取り調査を行い、意見集約に努めた。

２．芸術祭開催趣旨

検討委員会では、「回を重ねても不変となる大きなフレーム（憲法のようなもの）を決め、秋田ならではの方針を決めたい。」という意見が出たことから、討議を重ね以下のとおりフレームを設定した。

「地域の創造」や「都市の再生」などをコンセプトに、世界に向けて社会的課題の提起と解決のヒントを発信する実験的な芸術祭とする。

芸術祭の開催を通して、将来、世界中のどの地域も抱えるであろう社会的課題に対するパイロット事業として、アートプログラムによって社会的課題を可視化して、その問題について考えていくための芸術祭、といった先進都市のイメージを構築する。

同時に、社会と向き合うため、市民が歴史・文化・人を取り上げ、「時層の旅」を通じて本市の「まちの魅力」「場所の力」を再発見・再評価することで、「まちに刺激を与え、変化を作るための芸術祭」とする。

意見交換を続ける中、「歴史や民俗、暮らしなど抽象的なものから、人、文化、建築物など具体的なものまで多方面にわたり、秋田は過去を大事にしない」という話が出た。検討中の芸術祭では、この失われたもの、記憶の底に残っているものを根底に置き、目に見える地域資源だけでなく、見えない地域資源も引き出しながら、社会的課題を掘り下げ、同時に郷土に対する誇りを醸成して行く考えである。

こうしたことから、平成 23 年度から 27 年度に開催された「あきたアートプロジェクト」のテーマである「時層の旅人」のコンセプトを継承し、発展させて行くことが望ましい。

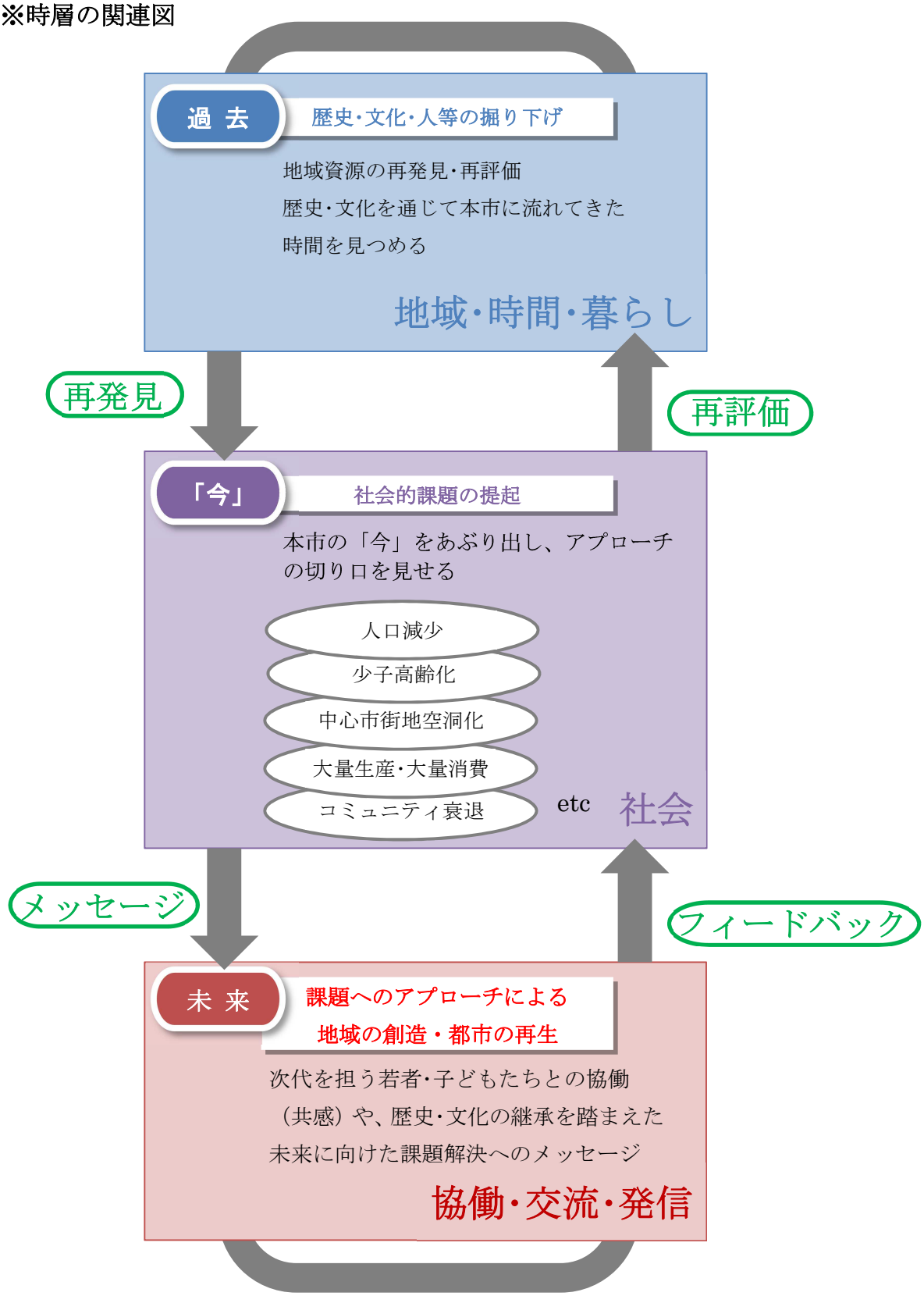
◆「あきたアートプロジェクト」のテーマ（平成 25 年度～）

「時層の旅人」 ・あきたに降り積もる時間の地層を掘り起こし、土地（場所）に埋もれているまちの物語を再びつないで、今の「秋田市」において時間の旅をする。

【あきたアートプロジェクト】

平成 23 年度から秋田県（平成 25 年度から秋田市も実行委員会に参加）が開催。アートによる中心市街地の活性化に取り組み、平成 25 年度から「時層の旅人」をテーマとして設定し、平成 27 年度まで使用している。

開催趣旨イメージ図
※時層の関連図



３．開催目的

アーティストと市民の協働による地域資源の活用と、アートによる社会的課題の提示により、人口減少の抑制や少子高齢社会への対応、中心市街地の空洞化対策などの課題にアプローチしていくことを目指し、（仮称）あきた芸術祭を開催する。

秋田の歴史や文化を踏まえて、今の「まちの課題」に挑戦し、新しい秋田の文化を市民とアーティストが一体となって醸成していく先進的な試み、という方向性のもと、以下の２つの軸を持つべきである。

（１）世界に向けた本市の魅力発信（国際的な芸術・文化のまちのイメージ確立）

本市の歴史・文化等を踏まえ、アートを通じて現在の本市の課題をあぶり出すとともに、アートが持つ非日常の魅力を活かし、世界に向けた未来を拓くメッセージを発信することにより、「先進的な都市」のイメージを確立し、交流人口拡大につなげる。

（２）市民の「まちへの誇り」を醸成し、市民力を高める

本市の歴史・文化を掘り下げ、再発見・再評価することにより、自分たちを取り巻く「今」を浮き彫りにし、アートを通じて「まちの魅力」を知ることで、市民が「まちへの誇り」を持つ意識を醸成し、市民力の向上を図る。

検討委員会における目的につながる意見

・現代の暮らし、歴史、文化に新しい価値を創造する実践の場とする。
・秋田市が取り組んでいる「文化芸術ゾーン」の整備と連携する＝まちづくりの面を持たせる。
・普段の生活では馴染みのないものをアートで発掘、再発見する。
・秋田が抱える課題をアートで可視化し、解決する方法を探る実験の場、実践の場とする。
・まちに刺激を与え、変化を作るための芸術祭という位置づけ。
・秋田＝教育の知名度を活かし、芸術祭を生涯教育の学習機会ととらえる。
・作品のいくつかはパーマネント（恒久作品）として残し、まちの景観を変えていく。
・アーティスト・市民・行政の協働による学術文化都市の構築を図る。

検討委員会における方向性につながる意見

・歴史的なものと現在抱えている課題の組み合わせ。
・外から注目を集めるための施策（美大との協働、情報発信力、アート特区、高いクオリティ、ブランディング等)。
・空きビル、空き店舗、廃校を活用するだけでなく、それが景観の一部となるような大きくまとまったプランづくり。

・美術大学のほか、県立、市立の美術館に中に入ってもらう。
・芸術祭の目的は外向けと内向けがあるべき。片一方はない。
・長期的な視点が大切である。越後妻有は都市整備計画とかかわっていて、継続する中で都市整備も進んでいる。
・十和田市は現代美術館ができたことでまちの景観も変わってきている。
・フレームから逸脱しない範囲で、毎回のテーマ、コンテンツ、会場の設定はディレクターに任せる。
・あきたアートプロジェクトのテーマ「時層の旅人」のコンセプトを継承。
・舞踊・舞踏の取り組み「踊る。秋田」との同時開催は難しいとしても、補完しあうことは必要。
・「食の提供」も重要である。
・１回目の開催の後の２年間も、シンポジウム等の実施は必要である。

４．プロジェクトテーマ

継続的に開催する芸術祭に通底する「テーマ」のもと、開催年（３年に１回）ごとに、作品制作やイベント実施のコンセプトとなる「プロジェクトテーマ」を設定する。また、社会的課題を踏まえ、未来に向けた「解決のメッセージ」を組み込むこととする。

回ごとに「少子高齢化」「空洞化」「福祉・教育」「歴史・文化」「人と暮らし」など、私たちを取り巻く社会的課題の切り口を変え、そのテーマに基づいた作家公募、作品制作・展示、イベント、情報発信を行う計画とし、歴史や文化の中で、時代や分野を絞り込んで設定することも可能とする。

毎回の「プロジェクトテーマ」は、エリア選定とともに、ディレクターが主導し決定することが望ましい。

プロジェクトテーマ（例）
第１回　中心市街地の空洞化　→「まちの歴史を旅する（昭和編）」
第２回　人と暮らし　→「人巡る旅・秋田での出会い」
第３回　大量生産・大量消費　→「秋田のものづくりと文化」など

５．開催エリア

全市的に波及効果があるよう、メイン会場とサテライト会場（サブ会場）での開催が望ましい。

（１）中心市街地（メイン会場）

秋田市が「文化芸術ゾーン」の形成を進める考え方であることから、中心市街地の県立と市立２カ所の美術館などの文化施設と、旧県立美術館や千秋公園、エリアなかいちを一体的に活用する。メイン会場では主に作品を室内に展示することとするが、市街地の広場、公園のほか、必要に応じて空きビル・空き店舗などの活用も考えられる。

（２）サテライト会場（サブ会場）

芸術祭のプロジェクトテーマのもと、地域の歴史や文化を踏まえた作品制作・展示や、市民の主体的なプロジェクトとして文化・芸術活動の発信を行う場とし、主に室外に作品を展示する。

（想定例：１）地域特性を前面に出す場合

新屋地区　→　美術大学、動物園、町屋、河口
土崎地区　→　港、海岸（北前船や海の記憶を浮き彫りにする）
雄和地区　→　雄物川、高尾山、空港、廃校利用
河辺地区　→　岩見川、岨谷峡、鵜養集落、岩見ダム
添川・藤倉地区　→　旭川、温泉、藤倉水源地、仁別、旭川ダム

（想定例：２）テーマ（社会的課題）を想定した場合

高齢化　→　太平地区、河辺地区等
医療　　→　外旭川地区（地域の医療機関）
教育　　→　新屋地区、雄和地区（美術大学、栗田養護学校、国際教養大学等）
コミュニティ　→　雄和地区、泉地区
防災　　→　土崎地区、新屋地区（津波等を想定）

（想定例：３）テーマ（時代や地域資源）を想定した場合

奈良～平安時代　→　寺内地区（秋田城周辺）
鎌倉～戦国時代　→　土崎地区（湊安東氏、旧土崎湊町周辺）
江戸時代　　→　泉地区（如斯亭、天徳寺周辺）
昭和　　→　金足（油谷コレクション、油田跡）

※なお、メイン会場（中心市街地）は交通結節点であり、県外・市外からの来訪者が最初に訪れる本市の玄関口であることから、サテライト会場を含めた芸術祭の全体像を理解できる案内や、情報発信基地が必要である。そのうえで、サテライト会場への二次交通手段や各地域（各会場）における食文化の提供も必要である。

※県庁所在地である秋田市版の芸術祭モデル（アートによる社会実験）を確立し、男鹿市や潟上市、由利本荘市、仙北市など隣接する市、もしくは飛び地的な市町村と連携して、広域的に開催していくことも考えられる。

検討委員会における開催エリアにつながる意見

・メイン会場は中心市街地。
・サテライト（サブ会場）はテーマ（時代）によって変える。
・サテライトは毎年変えていい。
・サテライトの設定はディレクターに任せる。

６．開催年度（スケジュール）

（１）開催手法

準備期間のことを考え、３年ごとに開催するトリエンナーレ形式が適当である。

・トリエンナーレの場合は、開催年度以外の２年間で情報発信・誘客活動や作家募集、制作期間の確保などに対応しやすい（２年に一度のビエンナーレでは、準備期間が不足）。

（２）第１回開催年度

平成 30 年度からプレイベントスタート（企画展・イベント等による開催周知）、32 年度に第１回開催が望ましい。

・第１回開催までの準備期間としては３～５年が必要である。
・平成 31 年度（市制 130 年）は「第２回 石井漠・土方巽国際ダンスフェスティバル」（県と連携したトリエンナーレ方式）の開催が決定していることから、連続した年度に集客効果があるよう、第１回の芸術祭はこれとずらしたほうが良い。ただし、第２回国際ダンスフェスティバル開催年度に合わせて、芸術祭のプレイベントを行うことは、効果的な PR につながると考えられる。
・市民にアートと社会的課題の解決を理解してもらうために、平成 30 年から周知を目的とした様々な企画開催が必要。
・芸術文化交流施設（旧県美）の活用も視野に、中心市街地をメイン会場として、平成 32 年度を第１回開催とすることが望ましい。

※社会的課題をアートとして活用するには、いきなり本番ではなくステップを踏むことが必要であり、シンポジウムなどの事前プロジェクトを準備段階から積み重ねていくことが重要。
※文化庁では、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした文

化芸術立国実現のため、全国的に文化プログラムを推進することとしており、この動きも視野に入れて開催のタイミングを検討する必要がある。

検討委員会における開催年度（スケジュール）につながる意見

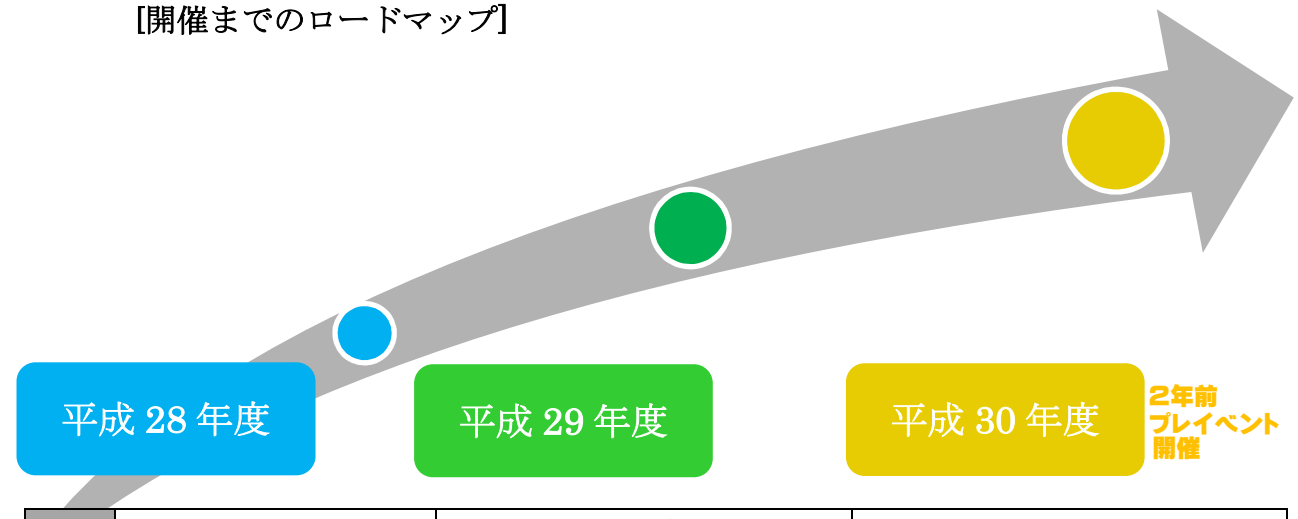
・初回開催は無理をせずプレ事業からスタートしてもいいのではないか。
・秋田市の他事業（「踊る。秋田」等）との調整もあるので、プレ事業は平成 30 年頃がベターではないか。
・他地域の芸術祭のスケジュールも確認する。
・他県では何かしらのアニバーサリーをきっかけとして始める例が多い。秋田では近々そのようなタイミングはないか。
・他県の芸術祭と重なるのはどうなのか。特に東北の芸術祭のスケジュールはチェックしたほうがいい。

	（仮称）あきた芸術祭	国際ダンスフェスティバル
平成 28 年度	シンポジウム等開催、事務局、準備委員会立ち上げ準備	○第１回開催
平成 29 年度	シンポジウム等開催、本格的広報開始、準備委員会等	石井漠・土方巽賞コンペ
平成 30 年度	↑ プレイベント開催	石井漠・土方巽賞コンペ
平成 31 年度	↓ 第１回芸術祭開催準備、公募等	○第２回開催 石井漠・土方巽賞コンペ
平成 32 年度	○第１回芸術祭開催 第２回芸術祭開催準備	石井漠・土方巽賞コンペ
平成 33 年度	第２回芸術祭開催準備	石井漠・土方巽賞コンペ

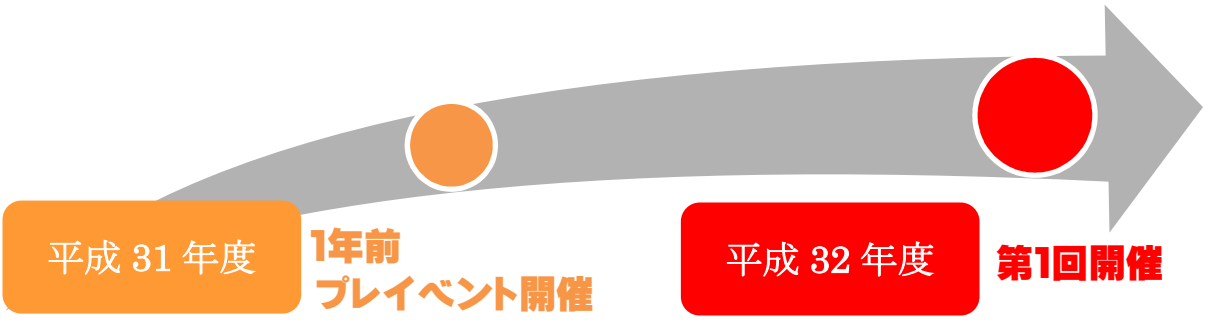
※集客、参加作家確保、作家の制作期間確保などの参考とするため、東北地方及び東北周辺で開催されるビエンナーレ、トリエンナーレの開催年度及びジャンル（テーマ）、客層（マーケティング）などを調査した表が 40 頁である。

（資料２）

[開催までのロードマップ]



	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
準備・運営	・実行委員会立ち上げ準備 ・実施体制検討 ・実行委員会検討 ・ロードマップ確認	・実行委員会立ち上げ、運営	・実行委員会運営 ・協賛企業集め ・各種助成金申請
開催実務	・プロデューサー、アートディレクター選定 ・メインテーマ、プロジェクトテーマ検討と決定	・作業分担による外部委託 ・ディレクターのもと、プレイベント内容、名称、エリア等決定 ・プレイベント会場確保、開催準備 ・プレイベント作品公募 ・プレイベント協働プロジェクト交渉 ・ロゴマークなどデザイン決定	・作業分担による外部委託 ・ディレクターのもと、プレイベント内容、名称、エリア等決定 ・プレイベント会場確保、開催準備 ・プレイベント作品公募 ・プレイベント協働プロジェクト交渉 ・２年前プレイベント実施
広報		・HP、SNS、広報スタート ・アート通信発行（年２～３回）	・芸術祭及びプレイベント PR スタート ・HP、SNS 活用 ・プレイベント記者発表 ・アート通信発行（年２～３回）
市民・大学協働	・秋美との意見交換 ・芸術祭フォーラム、セミナー開催	・秋美との意見交換 ・芸術祭フォーラム、セミナー開催 ・ボランティアスタッフ組織化 ・市民への説明会、意見交換会、ワークショップ等開催 ・美大大学院開設→院生との連携	・秋美との意見交換 ・市民への説明会、意見交換会、ワークショップ等開催 ・芸術祭フォーラム、セミナー開催 ・ボランティアスタッフ組織運営 ・廃校活用 ・美大院生との連携
調査	・秋田の時層調査 ・近隣芸術祭（みちのおく芸術祭など）調査	・秋田の時層調査 ・近隣芸術祭調査（リ・ボーンアートフェスティバル等） ・市内の廃校、空きビル、空き店舗調査	・近隣芸術祭調査（水と土の芸術祭等） ・市内の廃校、空きビル、空き店舗調査
次年度準備	・29 年度準備	・プレイベント準備	・プレイベント準備 ・第１回開催準備



準備・運営	・実行委員会運営 ・協賛企業集め ・各種助成金申請	・実行委員会運営 ・第１回開催準備 ・協賛企業集め
開催実務	・プレイベント開催準備 ・プレイベント出展作品制作 ・プレイベント会場との打ち合わせ ・空きビル、空き店舗、廃校利用 ・会場設営 ・インフォメーションセンター設置 ・シャトル便、ツアーバス運行 ・各種看板設置 ・スタンプラリー準備・実施 ・「食文化」提供 ・１年前プレイベント実施 ・公式記録 ・アンケート調査実施 ・後片付け ・報告書作成	・参加作家との打ち合わせ ・展示作品制作 ・各会場との打ち合わせ ・空きビル、空き店舗、廃校利用 ・会場設営 ・インフォメーションセンター設置 ・シャトル便、ツアーバス運行 ・各種看板設置 ・スタンプラリー準備・実施 ・「食文化」提供 ・第１回開催 ・公式記録 ・後片付け ・報告書作成
広報	・公式ガイドブック、マップ作成 ・記者会見 ・プレイベント広報物制作、PR ・HP、SNS 活用 ・アート通信発行（年２～３回）	・公式ガイドブック、マップ作成 ・広報物制作、PR ・HP、SNS 活用 ・記者会見 ・アート通信発行（年２～３回）
市民・大学協働	・秋美との意見交換 ・ボランティアスタッフ組織運営 ・市民との協働作業 ・芸術祭フォーラム、セミナー、市民ワークショップ開催 ・廃校活用 ・美大大学院生（修士課程）修了者→実施体制への参加・協力	・ボランティア組織運営 ・市民との協働作業 ・秋美との意見交換 ・芸術祭フォーラム、セミナー、市民ワークショップ開催 ・市民アートプロジェクト開催 ・美大大学院生（修士課程）修了者→実施体制への参加・協力
調査	・近隣芸術祭調査（AOMORIPRINT トリエンナーレ、みちのおく芸術祭等）	・近隣芸術祭調査（リ・ボーンアートフェスティバル、札幌国際芸術祭等）
次年度準備	・第１回作品公募、作品審査・決定 ・会場確保 ・市民との協働作業 ・秋美との打ち合わせ ・記者発表 ・参加作家との打ち合わせ ・市民アートプロジェクト検討 ・芸術祭協働プロジェクト交渉	・33 年度に向けた準備 ・市民アートプロジェクト準備

東北及び東北周辺で開催される主な芸術祭リスト							
芸術祭名称	開催年度					開催地	毎年開催、ビエンナーレ、トリエンナーレ
	H28	H29	H30	H31	H32		
みちのおく芸術祭山形ビエンナーレ	○		○		○	山形市内	ビエンナーレ
茨城県北芸術祭	○					日立市・常陸太田市・高萩市・北茨城市・　常陸大宮市・大子町	ビエンナーレかトリエンナーレかは決まっていない
いわてアートプロジェクト	○					盛岡市内	未定
AOMORIPRINT トリエンナーレ	○			○		リンクモア平安閣市民センター	トリエンナーレ
リ・ボーンアートフェスティバル		○			○	牡鹿半島・石巻市内中心部・松島湾(塩竈市・ 東松島市・松島市・女川町	トリエンナーレ
札幌国際芸術祭		○			○	札幌市	トリエンナーレ
大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ			○			新潟県十日町市、津南町	トリエンナーレ
水と土の芸術祭			○			新潟市	トリエンナーレ
文化公園アートフェスティバル		○		○		苫小牧市	ビエンナーレ
三陸国際芸術祭						岩手県大船渡市・気仙沼市・陸前高田市・大槌町・住田町	27 年度開催。以降未定
南郷アートプロジェクト						青森県八戸市(八戸南郷文化ホール)	27 年度まで毎年開催。以降未定だが開催予定。
すすきの夜のトリエンナーレ		○ 予定			○ 予定	北海道札幌市	トリエンナーレ。26 年度以降未定
十和田奥入瀬芸術祭			○			青森県十和田市	５年ごと開催

7. 開催期間及び時期

開催のコアとなる期間は、１～２か月程度が望ましいと考えるが、プログラムテーマに沿った形で、展示･イベントの集中する時期を設けるなど、期間に濃淡を持たせる。

8. 実施体制

（1）体制

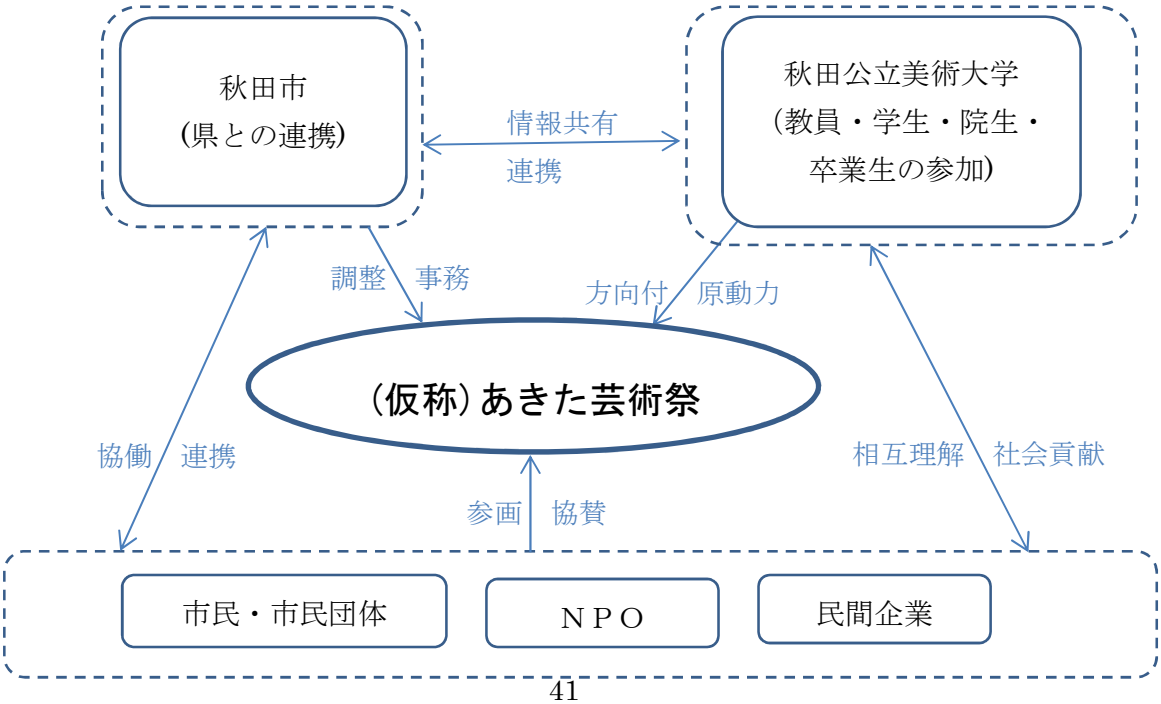
芸術祭の実施体制については、秋田市をはじめとする行政【官】と秋田公立美術大学【学】、そしてNPOや市民団体、地元企業等【民】の三者が協力･連携して進めていくことが重要となる。

・運営は実行委員会形式が適当であり、その事務局機能は将来的には【民】、あるいは【学】に関係するアートマネジメント NPO などが担うことが理想であるが、実行委員会立ち上げ当初は秋田市がその役割を果たすことが求められる。

・継続的な活動ができる組織体制を目指すという意味で、イギリスのアートカウンシルのように、公的資金の受け皿となる専門性を持った独立組織の育成やビジネスにつなげるための仕組みづくりも視野に入れたい。

・実行委員会の構成としては、全体を統括するプロデューサーの下に個別テーマ毎にディレクターを置く「部会制」とし、県外の人材活用など第三者的視点を意識した構成とすることが望ましい。特に、芸術祭全体の方向付けに大きな役割を果たすプロデューサーについては、なるべく早い準備段階から確保することが望ましい。

［実施体制イメージ］



※芸術祭の立ち上げにあたっては、政策的な位置づけを明確にすることが重要であり、「部会」のような場で政策論にしっかり取り組む必要がある。

※プロジェクトテーマに応じて、民間の連携事業を募る手法も考えられる。例えば「高齢化」の課題に関連して、展示会場としての民間病院の参加などもあり得る。

（２）予算規模、資金確保

各地の例から見ると、予算規模は様々で、１億円以下から、４～５億円までと幅がある。今回の調査対象芸術祭のうち、最も額が多いのは大地の芸術祭で、２年間の準備期間を含めると６億円以上となっている。

混浴温泉世界は実行委員会方式だが、中心となった地元のNPOが240万円の負担金を出している。大地の芸術祭と水と土の芸術祭は大半を国、県、市などの補助金が占めている。瀬戸内生活工芸祭は補助金なしで入場料収入や審査料、出店料がほとんどを占めている。

秋田市の場合、実行委員会形式としても、当分の間、入場料収入やNPOなどの負担金は多く望めないと考えられるため、国、県、市の補助金のほか、公益財団や企業財団（他都市の例：(財法）地域創造、アサヒビールやベネッセなど）からの助成金を確保する必要がある。事業規模として１～２億円を見込まないと、社会的課題を提示する実験的な芸術祭の開催は難しいと考えられる。

プロジェクトテーマが社会的課題の提起であることから、防災や環境、教育など取り上げる内容によって、活用できる補助金メニューも幅広く検討する。

調査対象の芸術祭　予算規模（開催年度予算　概算）			
所在都市	名　　称	予　算	行政負担金
別府市	混浴温泉世界 2015	8,200 万円	4,900 万円
十日町市・津南町	大地の芸術祭 2015	３億 8,300 万円	１億 3,600 万円
新潟市	水と土の芸術祭 2015	２億 7,000 万円	２億 5,600 万円
高松市	瀬戸内生活工芸祭 2014	700 万円	0 円

検討委員会における実施体制につながる意見

・ディレクターだが、秋田の人の視点（美術大学の人）と、外からの視点とが組み合わさった体制で進めたほうがいい。

・プロデューサー、ディレクターの２人体制でやるほうがいい結果が出ると思う。

・別府にかかわった芹沢高志さんに相談する手法もある。

・ディレクターの選定や実施体制は、規模や場所次第だ。

９．期待される効果

（１）魅力発信・地域活性化への効果

ア　都市イメージ確立（国際的な芸術・文化のまち）

アートというアプローチで、将来、世界中の都市が直面するであろう社会的課題を提示し、その解決に向けたヒントを表現する先進都市としてのイメージを発信する。

また、美術館や美大との連携、広場、公園など市街地を活用しながら、「芸術・文化のまち」としてのイメージを確立し、世界に向けた本市の情報発信を強化。そのことにより本市の新たなファンの獲得にもつながる。

イ　交流人口の拡大

交流人口が増え、地域の活性化につながる。

県内外からの来訪者が宿泊し、消費活動することで経済効果も見込める。

ウ　移住・定住促進

「アートを使った社会的課題への取り組み」という、知的で豊かな地域社会イメージをアピールすることにより、高齢者をはじめとした首都圏からの移住促進につなげる。

また、芸術文化ゾーンの形成とあわせて、市民理解が進み、芸術活動の環境が整えば、アーティストなどの移住につながる。

（２）秋田市民への効果

ア　市民力の高まり

アートを通じて社会的課題を認識し、その解決を自ら考え、取り組むことで、市民活動が活発化し、市民力が高まる。

イ　秋田市の魅力再発見

まちの歴史、文化、人、記憶、暮らしなどを意識し、土地（場所）が本来持っている力に光を当て、魅力を再発見することで、「まちへの誇り」を持つ意識を醸成する。

ウ　地元アーティストや市民の人材育成

身近な場所でアートに触れ、作家の協働などを経験することで、まちづくりへの関心が高まる。

県外作家とのコラボレーションにより、経験・ノウハウが蓄積される。

市民がアートマネジメントの実践に関わる機会となり、芸術祭をはじめとする市民活動などの人材育成につながる。

10. その他

（1）情報発信・PR

住民参加型のアートフェスティバルが盛んな東京都足立区北千住では、「区広報」の積極的な活用や、自前の紙媒体の新聞発行により、住民への情報発信が功を奏している。開催までの準備期間を含め、「広報あきた」の毎号コーナー確保、自前の広報媒体(アート通信)の発行、ホームページ、SNS などを効果的に活用し、市民が活動する姿(協働)を広く発信していくことが重要である。

また、地元新聞やテレビなどマスコミとの連携が大事で、記事で取り上げてもらうことにより、アートと社会との接点を強く訴えていきたい。

（2）アーカイブの活用

アーカイブ構築することを念頭に置き、スタート時から情報（写真、シンポやセミナーなどの音声記録、新聞記事、情報発信、ほか）収集に努める。このことにより、WEB での情報の継続的発信と情報更新、マスコミなどへの対応、記録集の制作など、多方面での利用価値が高まる。

（3）評価

市民が地域の魅力を再発見すること、交流人口の拡大につながる魅力発信・地域活性化を目指すことから、評価は短期間では現れない。

そのため、芸術祭に向けた準備段階や、ボランティアなどへの市民参加人数、実行委員会への参加団体や参加階層を把握し、評価の一項目とすることも考えられる。

また、芸術祭に関する情報発信、ＰＲやアーカイブ構築により、市民協働（参加）の状況を記録し、残すことも将来の評価につながる。

芸術祭全体のコンセプト

「地域の創造」・「都市の再生」

世界に向けた社会的課題の提起とアートによるアプローチ
市民が地域を掘り下げ、社会的課題と向き合う実験の場

	世界に向けて	市民に向けて
開催目的	芸術祭の開催を通して、将来、世界中のどの地域も直面するであろう社会的課題に対し、アートを通じて実験的にアプローチする「先進的な都市」のイメージを構築する。	社会と向き合い、市民が歴史・文化・人を取り上げ、「時層の旅」を通じて「まちの魅力」「場所の力」を再発見・再評価し、「まちに刺激を与え、変化を作る機会」とする。
開催趣旨	世界に向けた本市の魅力発信（国際的な芸術・文化のまちのイメージ確立） 本市の歴史・文化等を踏まえ、アートを通じて現在の本市の課題をあぶり出すとともに、アートが持つ非日常の魅力を活かし、世界に向けた未来を拓くメッセージを発信することにより、「先進的な都市」のイメージを確立し、交流人口拡大につなげる。	市民の「まちへの誇り」を醸成し、市民力を高める。 本市の歴史・文化を掘り下げ、再発見・再評価することにより、自分たちを取り巻く「今」を浮き彫りにし、アートを通じて「まちの魅力」を知ることで、市民が「まちへの誇り」を持つ意識を醸成し、市民力の向上を図る。
開催効果	ア　都市イメージ確立 （国際的な芸術・文化のまち） イ　交流人口の拡大 ウ　移住・定住促進	ア　市民力の高まり イ　秋田市の魅力再発見 ウ　地元アーティストや市民の人材育成

調査・作成　　NPO 法人 あきた地域資源ネットワーク
〒011-0951　秋田市土崎港相染町字沼端 71 - 11　ポートプラザ秋田２－11
TEL　018-816-0610